

一わが人生の回想

佐土原 台介

第一章 悪ガキの時代

はじめに

太平洋戦争勃発の年に生を受けた私は、戦争というものを体験した訳ではないが、敗戦間際とその直後の庶民としての生活に、多少なりとも影響があったというべきであろう。

幸いにも家族の誰一人として戦争で亡くなった人間はいないので、ことさらそう思うのかもしれないが、戦争の真の恐ろしさと悲惨を味わうということはなかった。というよりむしろ子供らしくのびのびと生きることができた、と断言することができる。

現代のように、TVもゲーム機もパソコンも携帯もなく、ただひたすらに野外で遊んだ。勉強する暇もないくらい、学校を終えた後は一日中外にいて遊んでいた。

昭和初期のほぼ10年間にわたる私たちの遊びは、現代の子供たちには想像することもできないような活発なものであった。悪ガキあるいは悪童といってもよい要素をふんだんに持っていたが、悪質なイジメをしたり、万引きをしたり、刃物などで人を故意に傷つけたりするような陰湿な犯罪行為は一切なかった。

他の町内の子供たちとチェーンや木刀を持って揉み合いをやったようなことはあっても、後に必ず和解し遺恨を残すようなことはなかったのである。つまり、違う町内の子供同士の争いは遊びの一種だったと今にして思う。

これから述べる私たちの遊びは、もはや二度と行われることはないが、その時に得た体験と記憶は、大人になった今の私たちの考え方、生き方、文化というものに対する想像力の涵養という点において、大きな原動力となっていることを確信するのである。

中学高校に進んでからは、子供時代の生き生きとした生活に比べて、思い出すことがすべて平凡であり、どこにでも転がるありきたりの数年であった。しかし、高校を卒業して後、私は自分でも想像もしなかった世界に飛び込み、大きく人生を弾けさせることになる。

第二章以降、中学高校時代を早送りにして私の破天荒の人生を語りだす日が来ることを願っている。では、私の悪ガキ時代の世界にしばし付き合っていただきたい。

(一)

昭和十六年八月十八日の明け方、私は愛媛県宇和島市の妙典寺前二区という場所で生まれた。七人兄弟の末っ子である。生家は元宇和島藩の藩屋敷の一角に位置し、ほとんど山際にあるといっている。

とはいえ先祖が藩士であったわけではない。両親は九州大分県の出身で、向こうで生まれた長女を連れて夜逃げするようにして宇和島にやって来た外国人だったからである。家は借家であったが、大きな杏の木をいただく広い庭があり、内庭にはおいしい湧水をこんこんと湛えた深い井戸があった。

生まれた年というのは米国相手の戦争の始まった年でもある。その年の十二月日本はアメリカに宣戦を布告して真珠湾攻撃を行った。

私が生まれた時の家族構成について述べれば、長女の喜久子はすでに海軍士官と結婚しており、次女久子、三女静子は家におり、三歳年上の四女妙子はまだ幼い子供であった。四番目の子供である長男日出男はその時まだ家にいたはずであるが、戦争末期予科練に召集されていった。三歳下の次男武之（たけし）は小学一年生であったはずである。三島由紀夫は小説『仮面の告白』で、産湯に浸けられたとき盥の縁が金色に輝いていたという記憶を記しているが、むろん私のような凡人が生まれたばかりの光景を記憶しているはずもない。

ただ断片的に覚えている最初の記憶は、ヨチヨチ歩きの頃だったと思うが、外に出る時に玄関先で粗相をしてしまい、下半身が生暖かい感触に包まれて不快な気分になり立ち往生したということ、三輪車で遊んでいて転び擦り傷を負ってしまったということ、母が着せようとしたお下がりの単衣が、背丈に合わせ裾の部分が他の布地で継ぎ足されていることに格好悪いと感じた、といったことである。

いずれも三歳頃の記憶であったと思う。さらに、強烈な印象を伴って記憶しているのは、私が熱湯か何かで右手を突っ込んで火傷をした時に、素早く母が私を人目のない別室へ連れて行き、自らの着物の裾を捲り火傷をした私の右手を秘所にあてがい、股で掌を締め付けて何か唱え事をしていたということである。火傷は冷水で冷やすのが最良の初期治療法であるが、生暖かい秘所に挟み込むというのは本来は逆療法であるはずである。あえてそうするということは、民間に伝えられたおまじないのようなものであったのであろう。場所が場所なだけにそのようなおまじないないし療法は後にも先にも聞いたことがない。おそらく、母の生地である九州地方に伝わるおまじないであると思われる。慌てた母の様子からしてかなり酷い火傷であったと思われる。そのおまじないが利いたのかどうか分からないが、現在右手に火傷の痕跡は残っていない。

戦争末期になり、米軍のB 2 9や戦闘機が上空に飛来し、焼夷弾をばらまいたり、戦闘機が機銃掃射する光景を、今日の前で見ているように鮮明に憶えている。宇和島には予科練という軍事施設があるので激しい空襲を受けたのである。

私の家の向かいには楠木さんという立派な屋敷があり、そこにはお婆ちゃんが同居していた。焼夷弾で燃え上がった火が楠木家に燃え移り火災となった。サイレンが鳴り渡り家族は避難したはずであるが、どうしたのか、お婆ちゃんが丸い食卓を抱えて家から出てきて、我が家と隔てた道路の真ん中にそのテーブルを置き、その前に正座して箸を持ってご飯を食べるような仕草をする。

父は空襲警報が発令された時、付近の住民を防空壕へ避難させる係りを仰せつかっていたらしい。メガホンで口を当てて懸命に住民に避難を呼びかけている。父は五尺前後の上背しかなく兵役を免ぜられていた。その代わり、どんな状況になっても最後までその場に居残って、住民を避難誘導する役目を担わされていたのである。お婆ちゃんを見つけた父は防空壕へ避難させようとするが、そこに座ったまま動こうとはしない。お婆ちゃんは家の火災で狂ってしまったのか、それとも痴呆症状を呈していたのであったのかもしれない。母に手を引かれるか負ぶさるかして、防空壕に避難する最中にちらりと目撃した光景である。

防空壕は家から歩いて一分ほども掛からない仏海寺というお寺の奥にあり、30人ほどが優に籠もることが出来る広さがあった。むろんそこ一箇所であったはずはなく、山裾に沿って何箇所も掘られていたと思う。空爆が去ると避難した人たちは家に帰ってきて（楠木家のように家が燃えてしまった人たちはどこに避難したのであろう？）、また日常生活に戻る。人々は度重なる空襲に馴れてしまってそれほど慌てなくなる。当時まだ四歳にもなっていなかった幼い私にもその様子はなんとなく分かった。空襲のサイレンがけたたましく鳴る中、私を背に引っ担いだ母は台所でえんどう豆を素早く炒め、それを袋に入れて防空壕に走っていった。豪の中で避難してきた人たちと豆を食べ合う姿を思い出す。防空壕の中をゲジゲジが這い回っている光景に出くわした時にはおそらく悲鳴を上げたはずだ。その声を聴いて、共に避難してきた大人たちは笑い声を立て、空襲で被害に遭うことなく逃げおおせた自分たちに安堵の溜息をついたのである。

人間はどんなことにも馴れる。どういう経緯であったか、私は隣家の宇都宮さんの家の庭にいて、大きな籐駕籠の中で軍鶏の闘鶏が行われる光景を眺めていた。四、五人の大人たちがいてそれぞれの最良の鶏を囃したて応援していた。そこにいきなり米軍の戦闘機が飛来し、機銃掃射を始めたのである。幼児の私は庭の隅にでも避難させられたのであろうが、大人たちの闘鶏は続いていて、掃射で庭の鉢木がパカパカと順に割れてゆく光景を目の当たりにしていた。それでも大人たちは、あたかも機銃掃射は目の前のスクリーンで上映されている映画でもあるかのように、割れてゆく鉢木にちらりと眼を遣っただけで闘鶏を止めなかったのである！

私のすぐ次の兄である武之は、戦闘機が何よりも好きで、米軍の戦闘機が飛来すると両親の眼を盗んで二階の屋根の上に陣取り、「あれはグラマンだ、あれはムスタングだ」と飽きず眺めていた。彼は大人になったら海軍に入り戦闘機乗りになることを夢見ていた。しかし、強度の近視であったために、その意志を実現することは出来なかったのであるが。

(二)

宇和島は全市が焦土になるということはなかった。四国山脈の末端に街があり、山裾から子供の脚で走り出して10分ほどで海岸に辿り着くほどの狭い距離で、街は横に伸びている。従って、海岸方面から山の方へ向かって飛来して焼夷弾を落とすB29は、街の中心部を通り越して山に爆弾を落とすことになり、山の方から海に向かって焼夷弾を落とす爆撃機は同じく街の中心部を通り越して海に爆弾を落とすという具合である。

爆撃精度の好い加減さが街を救ったといっても良いであろう。被害は山裾と海岸の一部の家々を焼いた程度で済んだのである。もちろん今述べた街の被害の状況などは後に聞かされたことであるが、戦争にまつわる記憶は尾を引くようにまだまだ続く。

私が四歳の時、降伏を告げる天皇の玉音放送を聴くことになる。放送を聴いたという記憶もニュース映画で見るような大人たちの反応もまったく記憶に留めていないが、戦争が終わったという子供なりの感慨は、予科練に召集されていた長兄の日出男兄が無事帰還してくるその姿を見ることによって得ることが出来た。

帰還の時刻を知らされていたのであろう。家の者全員が玄関の外に出て待つ内に、軍服に戦闘帽、脚にゲートルを巻いた18歳になったばかりの日出男兄が、腰に形ばかりの短剣を吊るし、ゆっくり近付いてきて皆の前で立ち止まり、姿勢を正して敬礼をする姿をいまだに瞼の内に焼き付けている。

日出男兄は広島県の呉で回天の乗員として訓練され、出撃直前に終戦によって一命を取り留めたということである。戦艦陸奥の機関部の将校であった長女の夫は戦時中少尉であったが、同じく一命を取り留め復員してきたときは中尉に昇進していた。運がいいことに陸奥が呉かどこかの港に入港していたとき謎の大爆発を起こし沈没してしまったのであるが、丁度その時休暇を取って街へ出ていてその大事故に巻き込まれなくて済んだのである。自分は助かったが、その時艦に残っていた部下たち、同僚、先任士官を死なせてしまうことになったわけであり、その痛恨と慟哭は今の私には計り知ることには出来ない。

妙典寺前二区の佐土原家には、戦艦陸奥生き残りの義兄とその家族をはじめ、次女の久子夫婦が移り住み、三女静子、四女妙子、長男日出男、次男武之、それに私と両親という大家族が同居することになったのである。空いている部屋はほとんどなく二階の八畳間が両親の居住空間であった。私はそこで小学校を終えるまでを過ごした。

父の仕事は、借家に隣接した授産場で営業を担当していた。父は自分の仕事を「外交員」と呼んでいた。当時は営業の仕事を外交と呼んでいたのかもしれないが、学校で必要な書類などに父の職業を書き込まなければならないとき「外交」と私が書き込むので、「お父さんは外交官なの？」と先生に訊か

れることがあった。私は営業という言葉を知らず「いえ、外交員です」と答え、納得がいかないふうの先生が首をひねるシーンに出くわすことが何度かあった。

授産場は団扇を造る工場で、手足や耳の不自由な人が働いており、工場は私の遊び場の一つでもあったのである。工場の一角に実質上の責任者である鬼生田（おにうだ）さんの一家が住んでおり、その一番下の息子が私の二歳年下の遊び仲間であったせいもある。

工場には一週間ごとに孟宗竹が数十本単位で仕入れられ、貯蔵場に運び込まれる。その青竹を決められた寸法に鋸で切り、それを工場に運び込んで何等分かに縦割りし、カッターのような道具に固定して細かく割いてゆく。それが団扇の骨になるのである。

工場の一角には渋団扇を造るための渋柿を煮る大釜があつて、当番の人がタオルで覆面をし分厚い皮手袋を穿いて、大きなしゃもじで中身を掻き回している光景をよく見詰めたものだ。釜の下は竹屑を燃料にして真っ赤な炎が燃え立っており、実に嫌な臭いが辺りを圧していた。近寄ることを禁じられていたのであるが、何故好んでその光景を恐る恐る眺めていたのか、よく思い出すが出来ない。もしかしたら、もう一つの遊び場所であった仏海寺で年に一回開帳される閻魔大王が見守る地獄絵で、鬼たちが煮え立つ大釜で罪人を煮殺す絵と重ね合わせていたのかもしれない。

青竹の切れ端は剣術ごっここの剣にもなり、また竹馬の材料ともなった。また工場で働いていた赤松のおっちゃんと呼ばれる坊主頭の従業員が、私のことを可愛がってくれ「坊、坊」と呼んでよく肩車などしてくれたことを憶えている。赤松のおっちゃんは縦割りにした青竹を等分に素早く割ることの出来る名人で、カッターのような道具であつという間に裂いた竹をヒュウと広げたら、それがそのまま団扇の骨の形となるのであつた。魔法でも見るような気持ちでその作業を眺めていたものだ。

むろん、仕事場へ入り込むことは禁止されていたが、工場の責任者の息子である鬼生田のみっちゃんに付いていけば、叱られることはなかった。工場には20人ほどの人が働いていたように思う。団扇だけではなく扇子も造っていた。父はその工場で造られた団扇や扇子の見本を持って、近隣の町や隣県の高知県へ営業に出かけることを仕事としていたのである。

戦前は植民地であつた台湾へも営業で出かけていったらしく、数日帰ってこないことが普通であつた。実は私の戸籍上の名は臺介（たいすけ）なのであり、臺灣の臺なのである。父が慰安をかねて母を連れて台湾へ旅行に出かけたとき、私を孕んだということで臺介と名付けられたと聞いている。自分たちの愛の結晶の記念というわけなのであろうが、もはや使われることの無い旧字を戸籍名とした罪は重い。未だに役所などに出す文書にこの旧字で書かなければならないのである。

父は近隣の町や高知県に出掛けるときはオートバイに乗ることが多かった。映画などでよく見る南洋の探検家が被る前後に庇が付いた白いヘルメットを被り、荷台に見本の入った皮の旅行カバンをくくり付け、長靴を穿いて工場の正門からオートバイで出かけて行く父の姿は、マジで格好良かった。

父はまた書に達者であり手紙は必ず行書体の毛筆で書いた。よく墨を磨らされたことを憶えている。

宝生流の謡の先生でもあり、週に一度は紋付袴姿で教授に出かけて行った。むろん家でもよく謡い、後に姉兄の誰かから聞かされたことであるが、佐土原さんが謡う声は一町四方まで聞こえたというほどであったらしい。低い張のある美声であり、うるさく感じたという記憶はない。父の謡の稽古が嫌いではなかった理由の一つは、稽古から帰ってくると必ず集まりで出たお菓子やお重の残り物を持って帰ってくれ、それが私たちの大きな楽しみとなっていたからである。

父母が九州出身であることは冒頭で書いたが、詳しく述べれば出生地は大分県の臼杵市である。母は臼杵に隣接する板知屋という漁村の漁師の次女である。紹介によるお見合いで会ったらしいが、どういう縁での紹介であったのか今は知る由もない。子供の頃は、宮崎県に佐土原（さどわら）という町があることをまったく知らなかった。後日私はそのことを知ったのであるが、父はよく「私の祖先は野武士の頭領であり、その地の支配者(地頭)が民に対して過酷な税を取り立てたので、地侍や百姓たちと語らって地頭の館を攻め滅ぼし、自ら領主を名乗った」と私たちに言っていた。

宮崎県の佐土原町と父の出身地である大分県の臼杵市は何百キロも離れており、二つの土地の繋がりがよくわからなかったのであるが、ごく最近になって佐土原町を訪れる機会があり、地元の図書館で町史などを調べてみたところ、父が言っていたことが創作ではなかったことを知ることができた。また臼杵と佐土原の繋がりが同時に知ることが出来、父が言っていたことが単なる妄想や創作ではなかったことが分かり、大きな驚きと感動を覚えたのである。その顛末については後に詳しく語ることにしたい。

また、母の故郷である板知屋は豊後水道に面しており、平安時代初期海賊で鳴らした藤原純友の本拠地日振島(愛媛県)と目と鼻の近さにあり、純友が滅びた後に伊予灘を跋扈した河野水軍の影響下にあったことは十分に考えられる。

私は幼稚園の頃板知屋の母の生家に連れて行ってもらったことがあるが、荒い波に洗われるごつごつとした岩礁に囲まれるようにして建つ平屋の薄暗い家は、今にして思えば、合図があればすぐに出撃してゆく態勢が整えられる海賊一家の格好の隠れ家のようにも思われてくるのである。母の先祖は漁師を隠れ蓑とする海賊であったと想像してみるのは楽しい。すると私は、山賊(野伏せり)と海賊を祖先とする両親から生まれたことになり、妙に血が騒ぐのを感じるのである。

(三)

話を元に戻そう。両親が長女喜久子を抱いて宇和島にやってきてすぐに職が見つかったとは思えない。何度か職を変えながら苦労して妻子を養ってきたことは想像に難くない。授産場に職を移す前に印刷所に勤めていたことを聞いたことがある。その頃から短歌に興味を抱いており(もしかしたら密かに書いていた)、私が成人したおり、皮表紙造りの分厚い石川啄木の歌集と大隈重信の演説集が二冊並んで書棚に置かれているのを見つけた。普通の本の造りと明らかに様子が違うので、父に問いただしてみたところ、出版された兩大御所の書籍を元に自分で勝手に編集して活字を拾って造り上げた、この世に一冊しかない本とのことであった。随分と凝った造りで、皮の表紙に金文字を压した本格的なものである。勤務の合間にかなりの日数を裂いてこつこつと造り上げたものに違いなく、父親の意外な面を垣間見ることとなった。そうした作業が印刷所で父の業績となったとは思われない。

むしろそうした私的な行為が職務に障害となった可能性すらある。そのことが印刷所を辞めた理由だったかどうか聞くことはできなかったが、何らかの理由で印刷所を辞め授産場に就職することになった。授産場というところは、障害者に手職を持たせることを目的に作られた一種の施設で、従って給料は恐ろしく安い。父を含めた事務職は身体に不自由のない一般人であったが、その俸給も一般の職の平均の半分ほどしかもらってはならず、家は苦しい家計を強いられていた。そのため母は和服の仕立をして家計を助けていた。しばしば徹夜で縫い物をしていたのを憶えている。仕立のスピードは異様なほど速く、羽織などは一晩で縫い上げていた。手馴れた人なら一晩で縫い上げることは造作のないものであったかもしれないが、私は母の仕立の早さに子供ながら感心したものである。

終戦直後の食べるものもろくにない状況下で、7人もの子供たちを育て上げた二人の労苦はほとんど想像を絶するものがある。上の三人の姉は終戦後間もなく次々に結婚し、親元から離れてはいたが、三女を除いては戦後しばらく家族もろとも家に居候していたのであり、食べるものに事欠く生活が続いたことは間違いのないところである。

長女の喜久子は美人で読書家であり、宇和島女学校(現在の宇和島南高等学校)を総代で卒業したほど出来が良かった。そのころのうら若い乙女たちの憧れの的であった海軍士官と結婚して、同年齢の乙女たちを羨ましがらせた。しかしながら、その結婚生活が幸せであったとはとてもいえない。敗戦によって退役して帰ってきた夫は、何かあるとすぐ姉を殴りつけプイとどこかに出かけてしまい、何日も帰ってこないことがあった(母から聞いた話)。そのせいいかどうか分からないが、姉は精神に異常を来たしやがて精神病院に入退院を繰り返すようになる。その間三人の女の子を設けたが、姉が入院している間は母が面倒を見なければならず、苦労がたえることはなかった。

この姉の一家を語ることは辛い。暗い悲惨な思い出だけで明るい話題を見つけることができないのである。しかし、折に触れて語ることになるであろう。こうした思い出は子供の頃の印象が元になっているとはいえ、かなり大きくなってから私の心にじわりと広がっていった感情であるにちがいない。子供の頃の私は明るい陽気な性格とは云い難かったが、大人の複雑な心の陰影とは関わりなしに、あまり病気をすることなく元気に澁刺と日々を送っていたのである。

病気と言えば、苦々しくも滑稽な思い出が一つある。たしか幼稚園に通い始めた頃のことだったと思うので、6歳になったばかりのころであろう。私は母に連れられて大分県の別府市に行ったことがある（そのときに板知屋の母の生家に連れて行かれたのである）。母の姉が別府に住んでいて訪ねたのである。

別府は町全体が温泉で、あちこちから源泉の湯気が立ち上って見える。「地獄温泉」と呼ばれる観光名所があって、そこはぬかるんだ湿地帯の一角から湯気が吹き出していて、泥水が沸き立ち、ぼこぼこ音を立てていたところで饅頭大のあぶくを作っては弾けている。そこへ転落したら一巻の終わりだ。観光名所になっているわけだから、むろんその回りは頑丈な手擦りができていて見物者の転落を防いでいるわけだが、その一角の湯溜まりにネットに入れた生卵を入れておくと、たちまちゆで卵になり一ネット10個入りで販売している。観光を済ませて帰るときに、母は一ネットを買って叔母の家を持って帰った。縁側で叔母と母が雑談に打ち興じている隙に、私は地獄温泉のゆで卵一ネットを食べ切ってしまったのである。母たちはそれに気付いてあきれんやら驚くやらしていたが、そのうち私が引付をを起こし倒れてしまったらしい。これは大変だということで病院へ運び込まれたのであったが、吐かせて点滴したりしたものの相当の重症で、一時生死の境をさまよったほどであったらしい。事なきを得て退院をすることができたが、それ以来中学生になるまでゆで卵を口にすることはできなかった。

ゆで卵を一度に10個も一度に食べることができることがあっても、家での食生活は極度に貧しいものであった。一部の人たちを除いては敗戦直後の環境にあつては、誰もが同じようにひもじい思いをしていたのである。憶えているのは、配給されたコーリャンを炊いたご飯、麦飯に薩摩芋を入れて炊いたものが主食である。食べなければひもじい思いをするだけなのだが、私はとくにコーリャンが苦手で、頑なに食べようとしないことがあった。その度に母に打たれたが、結局は遊び盛りの子供としては食べるしかないのである。何の味もしないあのぼそぼそとした口当たりのコーリャンの食感を今でも思い出すことがある。

芋飯もあまり好きではなかったが、コーリャンよりははるかにましであった。おかずはほとんど思い出すことができない。野菜などは滅多に口にすることはできなかったのではなかろうか。元海軍士官の義兄が猫を捕まえてきて、鍋にして家族全員でつついたこともある。やたらにあぶくが出て嫌なおいがし、子供心にも嫌悪感を抱いた。

食べ物といえば私の直接的な記憶ではないのであるが（姉か近所のオバサンから聞かされたものであったと思う）、母は近所の人から「予科練おばさん」と呼ばれていたという。何故かというと、国民全員が強いられた戦争期の乏しい食糧事情にも関わらず、母は小豆と砂糖をどこからか手に入れて重箱三つ分にもなるおはぎを作って、市の郊外にある予科練に出向き、まだ二十歳にもならない訓練生にせっせと配って歩いた。

自分の息子が訓練生であったわけではない。まだ高校生になったばかりの少年たちが、お国を守るために親元から離れて厳しい訓練を受けていることに同情して、おはぎを届けに行ったのだそうである。どれくらいの頻度で配りに行ったのかは分からないが、そういう徒名が付くくらいであるから、かな

りの頻度で通ったものと思われる。おそらく太平洋戦争前か戦争初期の頃ではあるまいか。従って私が生まれる前後のことであり、食糧事情はそれほど逼迫していなかったのかもしれない。

母は他人の窮地を見ると居ても立ってもいられない性格の持ち主であり、仕立ての仕事や保険の外交で得たお金を請われるままに人に貸したり、借金の保証人として印を押していた。戦後の混乱期に借金をしてすぐに返せるような人はまずいない。結局は、保証人の印を押した母が払うことになる。フロックコートを着た年配の金貸しが借金の取り立てに毎日のように家を訪ねてきていたのを憶えている。家計を補うための借金ではないこともあって、そのことで父と言い争う光景が暗い印象として記憶の底にわだかまっている。母はお人良しで楽天家であったが、父の乏しい給料を補うために、夜なべで注文の着物の仕立てをし保険の外交をやって家計を養う頼もしい肝っ玉母さんであった。

(四)

チョコレートやチューインガムといった嗜好品の味を覚えたのも敗戦直後のことである。言わずと知れた連合国駐留軍によってそれはもたらされた。私と同じ昭和十六年前後に生まれた人たちは、同じ経験をしている人たちが多いはずである。

戦勝国であるアメリカは日本全国津々浦々まで軍隊を派遣して駐留させ、旧日本軍人の反乱や抵抗を防ぐとともに、混乱の極に達していた国情を納めようとした。彼らは国民感情に逆らう行動は務めて避け、むしろ融和に努めた。そのためには子供たちを手なずける方法が一番手っ取り早い。鉄兜を被った米兵二三人を乗せた小型ジープで街に繰り出してきて、遅い速度で走りながら大量のチョコレートやガムをばら撒いた。子供たちはジープが来ると後ろに付いて走り、撒かれるチョコやガムを夢中になって拾ったのである。甘いお菓子など口に入れる機会のない子供たちにとって、あのとろけるようなチョコやガムの味はまるで天に昇る心地にさせてくれた。四歳になったばかりの私は、年長の子供たちの最後尾について懸命に走ったが、拾うことが出来たのは稀で、先頭を走る小学生のガキ大将たちに「戦利品」は独占されて悔しい思いをした。

あるとき、ジープに付いて走っていた私はつまずいて転んだ。脛を擦り剥いて地を流し泣きべそをかいたのだと思う。するとジープが止まって米兵が降りて来て、地面に座り込んでベソをかく私に近寄り、擦り剥いた箇所に傷薬を付け包帯を巻いて手当てをしてくれた。そうして、両手で持ちきれないほどのチョコやガムを手渡してくれたのである。羨望に歪むガキ大将の顔を想像してみると、思わず笑みがこぼれてくる。

幼少の私には進駐軍に対する嫌な思い出はまったくといって良いほどない。ただし、その無謀さに一度だけ驚いたことがある。私の家の近くに仏海寺というお寺があるが、お寺の境内へ出るためには、30段ほどの石段を登らなければならない。仏海寺は私たちガキっ子の格好の遊び場でありその日も石段付近で遊んでいたところ、酔った米兵たちの乗ったジープが石段前にやってきて大声で何か叫んだと見る間に、エンジンを噴かして石段を登り始めたのである。歓声を上げながら瞬く間に石段を登

り切り、上で方向を変えてまた降りて来た。私たちはただ呆然と見つめているだけであった。海と山しかない日本の田舎の町にやって来て、無聊を持て余す占領軍の若い兵隊たちにとって、飲酒と多少の無謀さは憂さを晴らす手段でもあったのであろう。私はその無謀さというよりは、40度を超える傾斜の石段を苦もなく登りきるジープの馬力の強さに驚いたのである。

占領軍が運んでくれた恩恵は、チョコとガムだけではない。彼らが落としていった焼夷弾の筒や機銃掃射でばら撒いていった薬きょうなどが、闇業者に売れたのである。直径2センチほどの機銃の薬きょうはたしか銅製であり、他のどんな落し物よりも高く売れた。私たちは町の隅々まで歩いて薬きょうを探して回った。

ある日誰かが予科練跡ならもっとあるかもしれないと言い出し（多分大人に言われたものであろう）、保手川を跨ぐ大橋を渡ってはるばる予科練跡まで出向いた。徹底的に破壊し尽くされた跡地は、焼け焦げて原型すら止めていない建物や施設の残骸が散らばるばかりで、めぼしいものは何も残ってはいないように見えた。他にも回収にやってきた先人が居たとみえ収穫はほとんどなかったが、ベルトや弾帯などを見つけて拾い機関銃の銃身を見つけて持って帰った者もいた。

米軍の機銃掃射は民間人にも容赦なく行われた。敵機来襲のサイレンに馴れ切っていた大人たちは、庭先で闘鶏に興じており気にする様子がない。そこに敵戦闘機が襲ってきて掃射を加えてきた時の情景を憶えている。

バリバリと音がしてようやく大人たちは（私も含めて）物陰へ隠れた。その直後パンパンパンという連続して植木鉢が割れる音がして、我々は生きた心地がなく首をすくめたが、敵機が去って庭の様子を見に行くと、棚に並べ置かれていた植木鉢が四五個真つ二つに割れており、その下に空薬きょうが落ちていた。期銃弾で割られたものではなく、落下してきた機銃の薬きょうの仕業だったのである。

植木の持ち主でもあるその家の主人（闘鶏の主宰者）は割れた植木を見て「酷いことをしやがる」とか何とかつぶやいた後、何事もなかったかのように闘鶏の再開を告げたのは言うまでもない。

（五）

闘鶏が行われていたのは地元の新聞社の記者をしていた宇都宮さん宅である。私の家の細い抜け道を挟んだ隣家で、我々が宇都宮のおっちゃんと呼ぶ地元の名物記者ともいうき人であった。私はまだ子供であったからおっちゃんが名記者であったかどうかは分からない。

「名物」というのは、夏には玄関も障子も襖も全て開け放した家の中で、せわしなく団扇を使いながら越中フンドシー一枚の裸の姿で一人将棋をしていたり、奥さんや子供たちを叱りつける声が途轍もなく大きく、「そろ始まった」と近所の人たちが苦笑いしながら騒動に聞き耳を立てるといった具合であり、時にはフンドシー一枚の姿で物干し竿を担いで家の外に飛び出し、逃げる奥さんを追っかけまわす

といったなりふり構わぬやんちゃ坊主のような人だったからである。

この家には息子が二人いて、下の子をむっちゃんと我々は尊敬を込めて呼び、近所のガキ大将なのであった。私がまだ小学生に上がるか上がらないころ中学生になったばかりの年だったはずであり、まさに遊びの天才であった。この人がいなかったら私の子供時代の思い出は随分貧弱なものとなっていたであろう。そうして、後の詩的想像力の涵養を培ってくれた恩人ともいべき人なのである。

様々の遊びはおそらく父親の宇都宮のおっちゃんから教わり受け継いできたものだと思う。そういえば宇都宮家には様々な野鳥が飼われていて、竹籠が軒から吊るされていた。鳥を入れる竹籠はおっちゃん自身が編み上げるのである。また軒には巨大なクモの巣があちこちに張り巡らされていて、その中央に肢の長さを入れれば10センチに達すると思われる不気味な女郎グモが張り付いていた。腹の部分が黒と黄色の縞模様になっているあのクモである。普段街では滅多に見かけることのない女郎グモがどうして人家の軒にやたらに棲み着いているのかといえば、山から生け捕りにしてきて飼っているからである。なぜ飼っているのかというと、喧嘩させるためである。

女郎グモは別名喧嘩グモといって、細い枝か割り箸の両端にそれぞれの持ち物のクモを置き、後ろから突いてやるとクモはお互いに走り寄って取っ組み合いとなる。適わないと思った方は、中央からスーと糸を引いて逃れようとするのであるが、勝ったほうはその糸を伝って負けたクモに辿り着き、素早く荷物を梱包する作業員のように、自ら吐き出す真っ白い糸であつという間にくるくると全身を巻いてしまう。隙間もなく梱包してしまうので、まるで不規則な形をした繭のようにみえる。ハエなどの餌を十分与えられているクモは、梱包しただけでまた枝の方に戻ってくるが、空きっ腹のクモは敗者を餌とするのである。

子供はただ遊びでクモの喧嘩をさせるが、大人たちはおそらく闘鶏のように金を賭けて喧嘩をさせるのである。勝敗は、どちらかのクモがスーと糸を引いて逃れた時に決する。したがって大人たちはそこで金のやり取りをし子供たちは歓声を上げて喜ぶ。もし負けたクモがぐるぐる巻きにされ、また餌となって勝者に体液を吸われて死んでしまった時には、また山へ行ってクモを見つけて来なくてはならない。

見つけてくるのは息子のむっちゃんの役目であり、そのときには家来の我々も同行する。ちょっと山へ入れば女郎グモはいたところにいる。ただし、宇都宮家の軒先に網を張っているような大グモを見つけるのは容易ではない。

むっちゃんだけではなく我々もまたクモを収集する。どうやって生け捕るのかというと、巣の真ん中に張り付いているクモを巣ごとさっと掌で掬い取るのである。モゴモゴと掌の中でうごめくクモを紙袋の中に入れて持ち帰る。家グモや土グモは気味悪く、見つけると悲鳴を上げて跳びすぎるのに、最も気味悪い姿と色をしている女郎グモはなんともないのである。掌の中でモゴモゴしていても気持ち悪いどころか愛おしい感じなのである。不思議といえば不思議であるが、同じ昆虫でもカブトムシや

クワガタは手で掴んでもなんでもないが、ゴキブリを平気で手で触る人はまずいないことと同じことなのかもしれない。気に入ったり役に立ったりするものは、たとえ姿かたちがグロテスクでもかわゆく感じられるのである。相性というもののなのかもしれない。

持ち帰った女郎グモはそれぞれの家の軒先に放たれ飼われる。放っておいても昆虫やハエなどが巣に掛かり餌には困らないと思いがちであるが、喧嘩に勝たせるためには常に元気で気力に充ちていてもらわなければならない。そのため、家でハエを捕まえて巣に投げ付け張り付かせる。様子を見ていた女郎グモはススッと歩み寄ってきて、長い八つの肢を見事に操ってものがくハエを瞬く間に梱包してしまう。その早業には見惚れてしまうほどだ。

しかしながら、問題が一つある。どの家庭でもクモの飼育を許しておくとは限らないからだ。どちらかという私の家もその口で、軒下に巣を張っているクモの巣が見つかるさっと竹箒で取り払われてしまう。むしろ、軒下に10センチはあろうと思われる女郎グモが何匹も堂々と巣を張っている家は、宇都宮家くらいだったのかもしれない。

昔は野鳥を家で飼うのは自由であった。したがって（天然記念物に指定された鳥以外は）勝手に捕獲しても良かった。宇都宮のおっちゃんがメジロやシジュウガラをおおっぴらに飼うことが出来たのもそのためである。

あるときおっちゃんから息子のむっちゃんに、メジロを捕らえてくるよう指令が出された。その方法を細々と息子に教えるおっちゃんの姿を今でも憶えている。その方法とはこうだ。魚釣り用の長い竹竿、鳥もち、鳥籠を二つ用意する。一つは空の鳥籠で、もう一つの籠にはオスのメジロが入っていないなければならない。捕獲作戦は小鳥たちの求愛の時期が近づく春先に限られる。囃作戦である。

持参する釣竿の先に、はねばねばした鳥もちがたっぷり塗りつけられた釣竿とメジロの入った鳥籠を提げたむっちゃんの後ろに、小学生になるかならないかの私たち子分は預けられた空の鳥籠を持ってぞろぞろとその後にくっ付いて行く。

メジロがやってくる場所はおおむね決まっていて、山裾の桜や檜の大木の比較的地面に近い枝にメジロの入った鳥籠を括り付ける。囃としての自らの存在を知ってか知らずか、オスはメスを求めて盛んに囀り続ける。メスが現れるのを我々は犯人が現れるのを待つ刑事のように辛抱強く待つ。やがてメスがどこからともなくやってきて、オスが囚われた鳥籠の近くの枝に止まる。樹の陰に隠れて辛抱強く待っていたむっちゃんが足音を忍ばせてそろりそろりと近付いてゆき、実に辛抱強くそう一と下から釣竿を伸ばしてゆき、鳥もちの付いた釣竿をぴたりとメスのメジロにくっつける。

それで捕獲できる割合は五分五分だ。セミやトンボと違って小鳥は大きく、くっつける場所を間違ったり鳥もちの量が少なかったりすると、逃げられてしまうのである。両羽に鳥もちが絡めば小鳥は逃げる事が出来ない。運よくくっ付けて手元に引き寄せることが出来ても、鳥もちから引き剥がすの

が大変な作業になる。必死に抵抗する野鳥から指の皮膚を食い千切られるのを覚悟しなければならない。手袋を嵌めていたのでは鳥もちがくっ付いてどうにもならず、素手でその作業を行わなければならない。何とか鳥もちを剥がして鳥籠に入れても、バタバタ暴れるのもう一つの鳥籠が必要なのである。

こうして宇都宮のおっちゃんは居ながらにしてメジロを手に入れることになる。鳥もちがくっ付いたメジロをどのようにしてきれいにするのか、そこまで私は確認していない。もしかしたら、石鹼を泡立てた手拭などで洗い流すのかもしれない（その当時台所洗剤などはなかった）。こうしてむっちゃんは、自然について、あるいは遊びについて、父親から手ほどきを受け知恵と知識を授けられ怒鳴られるなどして、遊びの天才として育っていったのであろう。

(六)

遊びの天才と呼ばれるためには、単にいろいろなことを知っていたり器用であったりするだけでは駄目なのである。我々子分たちの一人一人の個性を把握し、有無を言わせぬ指導力のも持ち主でなくてはならない。

むっちゃんは、器用さ、知識、勇敢さ、創造力、指導力の全てを備えていた。楯突くことなど思いも寄らないほどの尊敬を我々から勝ち得ていたのである。彼の指導の下で我々がどのような遊びをしていたか、思い出す限りのことを述べてみよう。

その第一が喧嘩ゴマである。コマは普通回して遊ぶものであるが、我々遊び仲間は勝ち負けを競う勝負の道具としてそれを使う。ジャンケンに負けて地上で先に回っているコマに自分のコマをぶつけ、先に回っているとコマの回転を止めさせるのである。

我々が使うコマは直径5,6センチでドングリを押し潰したような形をしており、その中央に鉄の芯が通っており、上に突き出た部分にコマ紐を引っ掛け、その紐を下に伸びた芯に絡ませて上の方に巻いてゆく。その端を小指に巻き付け、肩の上にかざし地面で回る相手のコマに叩き付けるのである。狙い違わず相手のコマに当たってそのコマが横倒しになって転げ回転を止めてしまい、なおかつぶつけた方が回転を続けられれば、ぶつけた方が勝ちとなる。

しかし、この喧嘩ゴマの恐ろしいところは、ぶつけて相手のコマを転がすという遊びの域に止まらず、相手のコマを破壊するところに行き着く。上から投げ下ろした瞬間鋭く尖らされたコマの芯は相手のコマに突き刺さって真っ二つに裂き割ってしまうか、刺さったまま二個とも転がってしまうかさせることが目的なのである。割られたコマは当然使い物にならなくなり、刺さったまま転がっても、刺されて方のコマは芯がぐにやりと曲がってしまい、そのままでは喧嘩ゴマの役には立たなくなる。芯を真っ直ぐにするのに一苦労しなければならない。金槌で叩いたり石に打ち付けたりして真っ直ぐに芯を直さなければならない。少しでも芯が曲がっていると回転する時間が短くなり、すぐに回転を止めてし

まっごろりと横倒しになってしまう

コマを回したと時、芯が真っ直ぐで微動だにしない状態のことを、私たちはジュンスイと呼んだ。紐を逆まきにしてボールの下手投げのようにコマを手から離して空中に放り投げ紐を手前に引くとコマは身体に向かって飛んでくるので、それを左の掌でひょいと受けるのである。そうするとコマは手のひらの上で回転し続ける。ジュンスイであるとコマは微動だにせず、まるで掌に垂直に立っているかのごとく回り続ける。ジュンスイのコマは掌の上で少しも重さを感じない。少しでも芯がずれたり歪んだりしていると、コマはぶれて回り重く感じられる。自分のコマがジュンスイであるとき、私たちはこの上ない幸福感を感じ、掌でぶれなく回転するコマを自慢し合うのである。

ところが、その自慢のコマがむっちゃんの標的にされるとまず破壊を免れない。確実に割られるか芯が曲がってしまう。いったん曲がってしまった芯をジュンスイにすることはほとんど不可能で、芯を取り替えなければならない。ペンチやヤスリで頭を落とした釘を使うのであるが、その釘は次第に太さを増してゆき、終には五寸釘を使うようになった。少しでも曲がって芯を付け替えてしまうとジュンスイは得られない。最新の注意を払って芯を付け替えジュンスイを得られた時の喜びは、高校受験に受かったときの喜びに匹敵するほどである。

五寸釘であるから、当たりの弱いコマにぶつけられても芯が曲がることはない。しかしむっちゃんに目を付けられたら万事休すである。狙い済ましたタカが獲物に襲い掛かるように、むっちゃんのコマは容赦なく自慢のジュンスイのコマに襲い掛かり、一瞬で破壊してしまう。そのとき得意げににやりと微笑むボスの顔はまるで地獄の鬼さながらである。何の痛みも容赦も感じていない顔だ。自慢のコマが破壊された時泣きべそをかく子も居るが、大抵は畏怖で縮み上がってしまい終には畏敬の念に変わる。何故か情け容赦がないというところに私たちは畏敬するのである。

むっちゃんはさらに嗜虐的ともいえる方法を考え出した。普通は地面の上で喧嘩ゴマを行うのであるが、彼は我々を仏海寺の境内につれて行き、寺門につながる敷石の上での勝負を要求した。その意図は明らかである。投げ付ける方は、もし手元が狂えば敷石の上に芯を打ち付けることになり、五寸釘であろうが何であろうが芯は修復不能なほどに折れ曲がってしまう。絶対に相手のコマの上に投げ下ろさなければならないのである。

手元が狂わないようにするためには、巻く紐を極端に短くして真上から垂直に投げ付けるようにすることが好ましい。とはいえ、この方法だとコマが十分に回転せずまた芯が真っ直ぐ下を向いてくれるとは限らない。刺さらないときには両者のコマはぶつかって転がるだけでありダメージは少ない。しかし芯が真っ直ぐに打ち下ろすことに成功したときには、相手のコマは確実に二つに割れ使い物にならなくなってしまう。どういうわけか、ぶつけられたコマが打ち割られたとき、ぶつけたほうのコマは何の損害も被らず毅然と回り続ける。

一か八かの勝負である。私たちは極度に緊張し勝負に入る。順番はじゃんけんで決めることもあるが、正式には同時にコマを回し合い、回転が止まった順番に回し始めることになる。ジュンスイなほどコマは長く回り続ける。ジュンスイにこだわるのは自己満足だけではないのだ。私たちは次の順番がむ

っちゃんの前にならないことを祈りつつコマを回す。運悪くむっちゃんの前の順番となったときは観念するしかない。

しかし、むっちゃんが必ずしも百発百中とは限らない。稀に失敗することがある。そのとき我々は歓声を上げさえするのである。失敗して芯が折れ曲がったコマを拾い上げ、無理矢理笑い顔を作ってみせるむっちゃんの姿を見て、私たちは心からほっとし幸運を喜び合う。

私たちはボスを嘲り笑っているのではない。心からほっとするのである。むっちゃんも自分の失敗を喜ぶ我々に復讐しようとしたり意地悪したりすることは決してない。次には決して失敗しないように自らに誓うだけだ。とはいえ、まずほとんど失敗することはない。

そこが問題なのだ。コマが破壊されれば新しいコマを買わなければならない。今の子供たちのように小遣いを持たされることはないから、コマを買う金を母親に願い出るしかない。母親は「こないだ買うばかりやないの？」と訝しげに問うが、私たちは（少なくとも私は）絶対に喧嘩に負けて壊されてしまうた、とはいわない。「無うなっしてしもうた」と困惑した振りを装っている。二度三度同じ言い訳は通じない。しばらく喧嘩ゴマを中止するか、何らかの名目で金を手に入れこっそり買い求めるしかない。

喧嘩ゴマは危険な遊びであり、まかり間違えば相手や自分の足に芯が突き刺さってしまう恐れがある。しかしながら、多少の怪我はすることがあっても大怪我につながる事故はなく（そういう記憶はなく）、今では緊張感のある面白い遊びであったという思い出として残っている。

（七）

もっと規模が大きい遊びは凧揚げである。我々の凧揚げというのは正月の風物詩として描かれるあんなのんびりしたものではない。凧揚げというのは遊びではあるが、極端に言えば自分のその場での命を懸けた必死の運動であり喧嘩ダコなのである。ここでも喧嘩ゴマと同じく喧嘩ダコという言葉がびったりと当てはまる。容易に想像が付くように、揚げた凧の糸を絡ませあって一方の凧の糸が切れ飛んで行ってしまえば、残った方が勝ちとなる。

ただこのやり方は、お互いの損傷が激しく感情的なしこりを残すのであまり行われたい。どちらかといえば、はるか遠くまで凧を泳がせ続けることの出来る技量の持ち主が尊敬される。凧は手元からと遠くなればなるほど風圧を受けて安定が難しくなる。数十メートルの距離であれば、市販のままの凧でも何とか空に浮かぶ。

しかし、百メートルを超えると作り直した凧でなければ安定して浮かんでくれない。私たちは主として市販の奴凧をベースにした。凧の肩と足回りの部分の四箇所にはタコ糸が括り付けられていて、それを中心に集めた部分に長く伸ばすことの出来るタコ糸が結び付けられている。タコ糸は20メートルほ

どの長さの単位で売られているが、我々は糸をいくつも買い足して、少なくとも百メートルを超える長さに繋ぎ合わせる。

遠くなる分だけ凧は不安定になるので（安定を失うとくるくる回転して失速して落ちてしまう）、凧を改造するのである。まずは両肩と足元の部分に括り付けられた四本の糸を倍以上の長さにする。さらに、安定させるための足元の部分の二本の短冊を一本が一メートルを超える長さにする。風で引きちぎれないように、障子張りに用いる丈夫な和紙を短冊形に切り取って張り合わせる。四本の糸は受ける圧力が均等になるようにするため、四本の糸を一つに引き絞ってそれが凧の中心部分へびたりと重なるように何度も調整する。もし、わずかでも位置が狂っていたら、凧はバランスを失って回転し失速して墮ちてしまう。

まるで航空機を設計する技師のように、寸分の狂いもなく中心点にびたりと四本の糸の中心が重なるように調整しなければ、凧を失うことになってしまう。その中心点がどこかということを知っているのがむっちゃんであり、その指示通り調節しないと凧は失速する。憎たらしい奴にはほんの少し位置をずらしただけで、「ざまあみろ」ということになるのであるが、むっちゃんがそうした意地悪を仕掛けたということはまずなかった。平等に教え平等に競わせて腕の優劣を決めるといった、まさに将にふさわしい人物だったというしかない。

凧揚げの場所は二百メートル級の段々畑の天辺である。その頃、四国の宇和島では段々畑はほとんどが芋畑で、それが天に続くかと思われるほど美しい壇を成して山の天辺まで続く。たとえ二百メートル級でも山の天辺となると風が平地より格段に強く、手元からずっと凧を離すだけでサーと大空に舞い上がってゆく。

そこで凧揚げ合戦に挑む子供たちは、百メートル以下のタコ糸を持っているものはない。糸巻にまるで焼いて膨れた餅のように厚みたっぷりに巻きつけられた糸は、捧げ持つ糸巻きのカラカラと激しく回転する音と共にあっという間に痩せ細ってゆく。見る見る凧の姿が遠ざかってゆく。百メートルを過ぎると凧に描かれた豪壮な髭の奴の顔は見分け難いものとなる。同時に、タコ糸を持つ手に強い風圧が掛かってきて、必死で糸巻きを支えなければならない。残った糸がゼロになるまで糸は伸ばさなければならない。凧の姿はすでに今の円玉ほどの姿にしか見えない。

さすがに二百メートルを超える糸を持ってくるものはいない。それ以上超えるとタコ糸は切れてしまうからである。百数十メートルで凧は大きくしない、糸はたるみながらもぐいと締まって指に食い込んでくる。そのうち、かぜの重圧で一方の垂れ流し（脚）が切れたり、重心を支える四本の糸の一本が切れたりすると、凧はきりきり舞いを始め、その反動で糸が切れて吹っ飛んでいってしまう。数人で近くに陣取り凧を揚げるのであるから、風の向きによっては互いの糸が絡み合っただけのため途中で切れ、あられもない方向に飛んでいってしまうようなことも起こる。

そこで「アア、行ってしまった！」と諦めてはならない。飛び去ってゆく凧の後を直ちに追いかけるのである。遠くに凧を泳がせていた子供たちも、素早く糸を巻き上げ吹っ飛んだ凧を追っかける仲間の後を追う。連帯責任のような感覚で全員が凧を探すのである。幸いに山の天辺にいるわけである

から飛び去る凧の方角は分かる。段々畑の道などは何の頼りにもならない。真っ直ぐ凧の行く末を見つめて直線的に走って追いかけて行くのである。その後を何人もの子供たちが、芋畑を蹴散らして走りすぎる。途中で畑仕事をしているお百姓さんに怒鳴られ、あるいは追っ駆けられることもあるが、ひたすら凧の行方を見定めながら一直線に走るだけである。場合によっては、山を走り降り、隣の町まで走ることもある。

大抵は見つからないが、電柱や木に引っ掛かって止まっている自分の凧を見つけることが出来たときには、涙を流して喜ぶ。それは激しく、きつく、肉体の限界ギリギリの労働を代価とした心からの喜びであり歓喜なのだ。私は今でも、右手の人差し指に食い込むようなタコ糸の重圧をありありと思い出すことが出来る。

(八)

むっちゃんの遊びえの限界は止まることを知らない。

父が勤めている授産場のことについてはすでに触れたが、団扇を造る原料は竹である。私の家のすぐ隣にある団扇工場には切り出したばかりの孟宗竹を蓄える場所があり、団扇の材料として使えるのはその三分の一である。残りは団扇に塗る渋を煮立てる燃料として使われる。したがってその管理はかなり甘い。枝を取り払った孟宗竹というのは十数メートルあり、材料に使う竹の余った部分は五メートル以上もある。その竹を貰ってくるのである。それが私の役目だ。父が工場の役職に就いているので、係りの人に話しをすれば快く余りの竹を貰ってくる事が出来た。

何に使うのかというと、竹馬の材料にするのだ。普通竹馬というのは、二本の竹の一つ目の節のところに踏み下駄を作ってその上に乗って歩くのであるが、五メートルもあると節は五つ以上残る。まだ四五歳の子供は第一段目で留め置かれるが、小学生にもなると、節は二段三段と延びてゆく。二段でも恐く感じられるのに、三段目になると自分の身長も含めて地上から二メートル近くになり、恐怖感を覚える。

それに乗って歩けるかどうかを試されるのである。すでに先端は五六十センチほどしかなく、先端を持つためには腰を屈めなければならない。二階の屋根から下を見下ろしている高さに感じられ、踏み下駄に乗るのさえ恐怖を感じるのに、両脚でそれに乗って進むとなると足がすくんで乗ることさえ出来ない。乗らなければ歩くことが出来ないので、臆病者としてみんなに嘲笑われるのである。

むろん、いきなり三段は無理であるから二段から慣らしてゆくのであるが、二段は自由に乗りこなせても、三段は別の次元になってしまうのである。とにかく怖い。統領のむっちゃんは三段どころか四段に下駄を作り(地上から二メートル強)、五十センチほど残った竹の先端を深々と拝むような形で握ってとんとんと大股で歩いてみせる。

「どうだ、ここまでやらなければまだ竹馬に乗ったことにはならないぞ」と無言で語っている。

恐怖に脚がすくみながらも、どこかの家の塀の上に攀じ登り、そこから三段の馬に足を乗せて一步踏み出す。大抵は竹が前に出ずゆっくりと前に倒れてゆく。倒れても、地上に近付いた瞬間両脚を前に投げ出せば怪我をするような転び方をしないで済むが、慌てて身体を振ったりすると変な倒れ方をして怪我をしてしまう。一度怪我をしてしまうと、恐怖が身に沁みて二度と三段以上の馬には乗れない。

三段をクリアしても四段五段が待っている。乗っただけでは済まされないのだ。三段の竹馬で駆けっこをする。いやさせられる。四段五段に下駄を作って乗る竹馬はやはり親たちにも危ないと認識されていて、むっちゃんも誰彼となく大人たちから注意をされていたが、注意をされて止めるようであれば統領の資格はない。これ見よがしに四段五段の竹馬に乗って駆け去ってゆく。私たちは賛嘆の目を向けて、二メートルを超える大股でゆっくりと歩み去る偉大な統領の後姿を眺め続ける。

街中の遊びに倦んだ時には、冬には山に、夏には川や海に出かける。私たちが生まれ育った宇和島という街は、街中から山と海双方に駆け出して行くのにそれぞれ10分とかからない。四国山脈の端くれが街の直ぐ後ろに出張っており、千メートル級の山々が嬾々と重なり合っている。

中でも鬼ヶ城山は街のどこからでも見える千数百メートルの深山である。そこには鬼がすんでいると言われ、地元の人には滅多に登ることではない。その手前に幾つもの山が重なり合っており、少し登るだけで遊び場所は幾らでもある。

代表的な遊びは合戦ごっこだ。仲間は敵と味方に二手に分かれえる。山に入って行き、幹の太い樹木を見つけ出すことから始める。10メートルほど離れた場所に向かい合うようにして聳え立つ二本の大樹がある場所が目安となる。その樹の二股に分かれた場所（地上から約三メートル）にそれぞれ小屋を作るのである。小屋といっても二股の安定した場所に小枝と葉っぱと荒縄だけで作る陣地である。その中に三人ほどが乗ってもびくともしない隠れ家を二時間ほどで作り上げる。

向かい合う側に入出口を設け、そこから手製の弓矢を打ち合ったり石を投げあったりして合戦の真似事をする。互いが降参をしない場合は景色が薄暗くなるまで陣地に立て籠もる。

むろん、まかり間違えれば大怪我を負いかねない危険な遊びなのである。矢は木の枝を削って作るが先は尖らせてある。私は一度相手側の矢を顔に受け目の下に突き刺さったことがある。誰が見ても危険な状態であるから合戦はすぐさま中断され、私は顔に刺さった矢を抜いて、流れる血を手ぬぐいで抑えながら下山し家に帰った。

母が私を見て仰天したが矢は深くは刺さってはいず、出血はやがて止った。母は誰にやられたのかとしつこく私に問い質す。それは納得ずくの遊びの結果であり、喧嘩ではないので相手は分かっていたが私は黙り続けた。しかし、母の余りにも執拗な追及に耐えられず私は相手の名を言ってしまった。

相手は近所に住むS君であったが、母は、顔の血が乾いてもいないうちに私を引っ立てるようにしてS君の家に連れて行き、出て来た相手のお母さんに対して謝罪を請うたのである。

私は相手の名を告げてしまったことに後悔し、恥ずかしさの余り俯いたままであったが、相手のお母さんは私に矢を射た息子を呼び出して二人して鴨居の縁に正座し、丁重に詫びたのであった。私は火が出るように恥ずかしく俯いたままであったが、ルール違反を犯した私を覗き見るS君の視線を確かに感じていた。現代なら、医療費を出せだの、訴えるだの、大仰な問題に発展しかねない事態であっただろうが、相手が謝ったというそのことで全ては終わったのである。それ以降、私は山での陣地遊びには参加しなかった。というより参加を拒否されたのであった。

他にもむっちゃんを統領として仰ぐ遊びは幾つもあったが、列挙はこれぐらいに止めておくことにしよう。小学生の高学年頃には、最早偉大な統領からは独立し、別な集団の遊びに移っていたように記憶している。統領のむっちゃん自体、高校生になろうとしており、幼い子供相手の遊びを卒業していたのかもしれない。

(九)

私が小学校高学年か中学生になったばかりの頃流行った遊びがあった。それは「ワンツキドッカンスッテンドウ」というものである。

おどろおどろしい名前であるが、遊び自体はごく単純なものである。市販されている動物を描いたトランプ大のカードをそれぞれ同じ数だけ配っておき、リーダーの掛け声を合図に町内の思い思いの場所に潜伏する。そうして相手を求めてそれぞれが走り回るのである。誰かを見つけると、お互いに歩み寄り、「ワンツキドッカンスッテンドウ！」と掛け声をかけながら、それぞれの手持ちのカードを一枚出し合う。そのとき、ゾウ、ライオン、トラなどの上位のカードを提示し、シカやオオカミを出した相手はライオンにカードを取られてしまう、という仕組みである。そうしてカードを全て失ってしまった者が負けになる。

ここで面白いのは、上位のカードを出せばすべて勝つという仕組みになっていないことである。トランプでいうジョーカーのようなカードを全員が持っており、それを出すと相手が最上位のゾウであろうがライオンであろうが、全てに勝つことになっている。ただしそのジョーカーも最下位のある動物(名は失念)のカードには負けることになっており、迂闊には出せない。そうしてカードを奪い合うことに全能力を集中する。仲間を見つければ必ずカードを出し合うということはない。自分が勝てると思った相手にタッチし「ワンツキドッカンスッテンドウ！」を呼ばわれればよい。

走り回っているうちに誰がどんなカードを持っているかという情報が次第に伝わってゆく。切り札を失くしてしまった者はただひたすらに逃げるだけだ。次第に伝わっていった情報を元に、その相手を見つけるとどこまでも追いかけて行く。

私はあるときそうした相手を見つけ追いかけていった。そうすると自分の家に逃げ込んでいったのでそのまま玄関に駆け込み、土足のまま座敷に上がった。相手も土足のままである。相手が駆けて行く後を追うと、あたかも家族が食事中でみんなが丸テーブルを囲んでいた。その横を相手はドタドタと駆け抜け二階に向かう階段を駆け上って行く。声も出すことも出来ずに私たちの追跡劇を啞然として見守る一家を尻目に、私も全速力でその後を追う。二階の部屋に追い詰められた相手は、いきなり屋根に上がり地上に飛び降りたのである。私も同じように屋根から飛び降りた。脚を挫くこともなく駆け去る相手を私も執拗に追う。

その結果相手に追いついたのか逃げ切られたのか、確かな記憶はないが、相手が後に父親からかなり強烈にお仕置を受けたことは間違いない。相手の男は友達であり家族とも懇意であったが、それ以降私が入り禁止になったことからしても、家族にとっては衝撃的なことであったのであろう。今にして思えばそれも懐かしい思い出の一つである。

こうして遊びのことばかり書いていると、勉強は全くしなかったのではないかと思われるであろうが、まったくその通りである。小学校へ上がってから(学校には休まず出席するが)勉強したという記憶はほとんどない。教室へ入っても悪戯ばかりしている。嫌いな先生の際は授業をボイコットして近所の公園や川に集団で遊びに出かけたり、自分たちが授業を受けるはずの教室の窓辺に校庭側から取り付いて中を覗き込んだりする。それに気付いた先生の慌てぶりはおかしいほどで、先生が窓に近付いて目を剥いて怒ろうとする前に、一斉にぱっと窓際から離れてゆく。

私は不良のメンバーではあったがリーダーではなく、いつもその下っ端に過ぎなかった。リーダーの統率力は尊敬に値するもので、集団行動を乱すものは容赦なく殴られ除名された。その統率力を試すため、全員裸足になって小便器の前に立たされることを強要されたり、雨が降った後校庭に裸足で走り出て、土を足でこね回したりさせられる。

これがどれほど罪深いかわかっていただけるであろうか？雨が上がった後、校庭で色々な運動が予定されているのであるが、ぬかるんだ土をこね回されると激しい凹凸が出来たまま土が乾いてしまうので、運動が出来ない。先生生徒を総動員して校庭を整地しなければならない。したがって、一時間目に予定されていた行事は中止せざるを得なくなる。

それがどんなグループによって行われたかは、窓から見ている生徒や先生が必ず居るので、当然私たちは校長室へ呼ばれる。校長がお説教している時、私は壁に掛けてある歴代校長の写真や賞状などを眺めながら、あんな変な顔をした校長が居たのだ、などと鼻くそをほじりながら考えている。

校庭荒らしはむろん校長のお説教だけでは済まない。親に連絡されるのである。親はただ謝るだけではなく、学校に出向いて謝罪しなければならない。当然、家でこっぴどく叱られ夕飯の絶食さえ強いられるが、それに懲りてすぐ翌日には始まるリーダーの無法な命令に抗うことは許されない。忠誠を

試される所以である。

リーダーは背が高く屈強な体格をしている上級生で、どうみても中学生としか思われたい。どちらかというと同級生の中でも背が小さい方の私などは、リーダーは絶対的な存在なのである。学校や親の体罰が苦でリーダーの命令を聞かないのではない。その集団からリンチを受け除名されることが恐ろしいのである。

一日中水の入ったバケツを持って校長室の前に立たされ、また放課後に全員で行う廊下掃除を一人でやらされる苦労は、除名される屈辱や苦痛に比べたら何でもないと思われるほどである。そのころすでに性に目覚め始めていたのであろうか？それとも単なる好奇心に過ぎなかったのであろうか？集団で行う行動の他に個人でも信じられないようなことをやった。

音楽の先生は、子供たちをどこか見下したような取り澄ました感じがする若い女性で、生徒たちから余り好かれていなかった。音楽室での授業の時間の前に、私は黒いカバーを掛けられたグランドピアノの中に潜り込んだ。先生が先ずピアノの前に座ることが分かっていたからである。いつもの取り澄ました表情で教室に入ってきた先生は、おもむろにカバーを取りピアノの前に座る。その時私はピアノの下から這い出てきて先生のスカートを捲り上げ、脚の中を覗き込んだのである。私がピアノの下に潜り込んでいることを生徒全員が知っているわけであり、その瞬間の先生の慌てふためいた様子に生徒全員が笑い転げた。むろん先生は私の襟首を掴んで校長室へ引きずっていったのであった。

そのときどういうお仕置きを受けたか覚えていないが、その小学校で一般的なお仕置きの一つである、水の入ったバケツをぶら下げて授業が終わるまで教室の前に立つという懲罰を課せられたのかもしれない。私はそのことでちょっとした英雄となり、同じ学年の子供たちにもてはやされた時期があった。同時に、マイナスな状況に立たされることにもなったのである。それ以来、音楽の授業をまともに受ける習慣と熱意を失い、音楽の授業が高校を卒業するまで苦手で、五線譜の読み方を結局はマスターすることが出来なかった。ちょっとした悪戯心が後々まで無念な影響を与えることになったわけである。

さらもう一つのあまり名誉とは言えない出来事を記しておこう。小学校の二年か三年の頃であったと思うが、国語の先生で眼のパッチリとした色白で美人の若い女の先生が担任となった。こともあろうにその先生におそらく恋心を抱いたのである！

その表現は実に幼稚で破廉恥なものであった。何を思ったか、先生の授業が始まる前に黒板に、「S先生の赤オメコ」とチョークで大書したのである。オメコというのは説明するまでもなく四国地方の方言で女性器のことである。むろん私は先生の秘所を覗き見たことがあるはずもなく、そういう表現も単なる思い付きである。実は先生は、授業中何か間違ったり思い出さなかったりすることがあると、誰が見ても分かるほど赤面する壁があり、色白の顔がぱっと赤くなる様は、子供心にも色っぽく感じられたのであろう。その記憶がとっさに下の方と結びついたのである。

どうしようもないませた悪童という他はない。教室に入ってきてその文字を見た先生は、当然一瞬は

ったようであったが、実に冷静に「誰が書いたのかは知りませんが、こういう悪戯は止めましょう」というふうなことを言い、その言葉を黒板消しで拭い去り、何食わぬ表情で授業を始めたのである。書いたのが誰か知っており、どういう顛末になるか固唾を呑んで見守っていた生徒たちは、笑うことも騒ぐことも出来ず、次の瞬間には授業に従う従順な子供たちに戻っていた。

大人になって帰郷した折、住所を探して先生と面会することが出来た。スケベ心を滲ませながら、そのときのことを何食わぬ風を装いながら尋ねてみたのであるが、先生は未だ容色が衰えていない澄んだ目でじっと私を見詰めながら、書いたのが私であることを知っていた、ということをおっしゃった。同席している生徒たちの目が、ちらちらと私に向けられることで先生は犯人が私であることを察しられたのだと思う。私はその先生がずっと好きで、中学高校を経て大人になっても憧れを持っていたのであった。今度は赤面するのが私の番であり、子供とはいえ、人前で語ることが憚られる20数年前の馬鹿げた悪戯を心から詫びたのであった。

小学校時代の先生でもう一人忘れられない先生がいる。K先生といって、国語社会を担当されていたように思う。K先生は吉川英治の『宮本武蔵』によほど感銘を受けていたとみえ、授業の前に全員机の横に正座させられ数分の黙想を強いられる。そのとき先生は

「君らが大きくなったら必ず『宮本武蔵』を読みなさい。君らの悩みに答えてくれるすべてがそこに書かれている」

と毎回呪文のようにおっしゃるのである。なぜ床の上に正座させられるのか分からなかったが、後年（それから40年ほど経ってからのことであるが）『武蔵』全巻を読む機会があり、武蔵が座禅によって悟りの境地をえるくだりに出会ったとき、先生の意図を理解できた思いがした。先生はお坊さんではなかったが、いつも丸刈りで濃い眉毛が印象的で、今思い返すと禅のお坊さんの風貌の持ち主であった。

(十)

先に述べたように遊びの天才と言っていいむっちゃんが中学の高学年に登る頃には、我々の遊びの相手をしてくれなくなったが、小学校に上がった私たちが次第に自分たちの遊びを覚えるようになったからでもあるように思われる。学校に通うようになって悪童ぶりはいささかも衰えることはなく、ますますつのっていった。

遊び場所のひとつが、家からすぐ近くにある仏海寺というお寺であった。終戦直後、このお寺の石段を占領軍の米兵がジープで登っていったことを先に述べたが、我々悪童もまたこの階段とそれに続く境内の石畳（喧嘩ゴマの項で言及した）が遊び場の一つであり、またその周囲の広がる墓所もまた当然のごとく遊び場の一つであった。お墓はかくれんぼの格好の場所であったのである。我々のかくれんぼは「見つけた」だけでは駄目なのである。走って追いつきタッチして初めて「敵」を捕捉したこ

とになる。お墓の陰に隠れていて見つければ当然のごとく脱兎のごとく走って逃げなければならない。ずらっと並ぶ墓石を飛び越えるようにして走って逃げる途中で、墓石に突き当たって倒したり、手で押し倒したりしてしまうことになる。ごろんごろんと倒れる墓石に構うことなくすっ飛んで逃げる。

その音を聞きつけて庫裏から和尚が出てきて大声で怒鳴り、走ってきて私たちを捕まえようとするが素早く逃げ去ってしまう。捕まったことは一度もない。墓石の間を走り抜けていて墓所を踏み抜いたり、石の床板をずらしてしまったりすることがあり、ぽっかり開いた地下の空洞を眺めることがあった。一メートルほどの深さがあり、コンクリートで固められた畳半畳ほどの広さの薄暗い空間は、冥界を除き見るようなわななきと躊躇があったが、中を覗き込む誘惑を退けるほどではなかった。

外光で薄暗く照らし出された墓所の内部には、幾つかの骨壺が納められていたが、骨壺だけではなく腕の骨や大腿骨が並べ置かれていたお墓もあった。すでにこの頃は土葬ではなく火葬であったから、なぜ黒く変色した腕や脚の骨が納められていたのか今もって謎である。おそらく火葬で燃え切らなかった骨の一部が納められていたのであろう。

現代の焼却炉は火力が強く、骨は骨格を残さないほどにきれいに灰になるが、私たちが子供の頃は、肉は焼け落ちるが骨は全身骨格が完全な形で残ったと思われる。昭和52年に母親が死に、焼却炉で焼かれて骨になって出てきたとき、骨格はきれいに残っていたことを憶えている。私が子供の頃はそれから30年も前のことであるから、焼却炉の温度はそう変わらないはずである。

人骨といえば忘れられない思い出が一つある。家に一緒に住んでいた義兄（長女の亭主）が私に、「山で行方不明になっていた〇〇さんが遺体で見つかったからこれからその骨を拾いに出掛けるそうだ」というようなことを言い、その骨が運ばれてくることになっている仏海寺に私を伴って出掛けた。山門を入ったすぐのところに大きな松の木が一本立っており、その根元に薙がひかれていた。そこに遺体が運ばれるのだという。

明るい内から今か今かと私たちは待っていたのであるが（近所の人たちもたくさん集まっていたように思う）、ドンゴロスを背負った男性がその場所に到着したのは夜になってからであった。松の木の周辺は、本堂からコードを引っ張ってきてその先に取り付けられた照明器具で煌々と明かりが灯されていて、くたびれ果てた様子で還ってきたドンゴロスを背負った男性が背の荷を降ろし、中身を取り出して薙の上に置いた。それは燻されたように黒ずんだ脚や腕や肋骨などの人骨であった。そのおどろおどろしい風景は一生の記憶となって私の頭の中に残った。

その仏海寺では肝試しが行われたり、年に一回本堂で巨大な地獄図が展示され、親に連れられてそれを見に行った。紅い口を開け恐ろしげに眼を見開いた閻魔大王の裁きの下で、大きなやっこのようなもので舌を引き抜かれようとしている地獄の罪人、石臼の仲で杵で突かれている亡者、針の山に追い込まれて串刺しになり、また火炎に焼かれる人たちが極彩色で描かれていて、絵を見た夜に夢にその光景が現われうなされたことなどを思い出す。今にして思えば、墓石を倒して走り回る私たち悪童を懲らしめる和尚の企みであったのかもしれない。

お寺の裏山には夏みかん（地元ではダイダイといった）の林があり、大きく実った実集団で盗みに行ったこともある。実がなるのは夏なので白のランニング姿では見つかり易いというので、全員冬に学校に通う黒い制服を着て盗みに出掛けるという周到さである。

盗んだみかんは家に持ち帰ることなく、人に見つからないような場所で食べた。当時の夏みかんは酸っぱくてそのままでは食べられないので、塩を付けたり重曹を付けて食べた。重曹を付けるとシュワッという音がして泡立ち、酸味が軽減されるのである。一度、待ち伏せしていた和尚に捕まったことがある。折檻されることはなかったが、長時間に亘って懇々と諭された。親に告げられることはなかったので安心した記憶がある。

盗みは論外としても、果物の実は私たちガキにとっておやつでもあったのである。私の家の庭には大きなアンズの木があり、毎年たくさんの大粒の実を実らせた。実がなるのが待ち遠しく、あるとき（小学校に上がるか上がらない頃）まだ実が青いうちに屋根に昇って実をもいでいるところを母親に見つかり、折檻を受けた上縛られて押入れに投げ込まれ、放置されたことがある。梅の実などもそうであるが、青い実を食べると酷い下痢を起こすことがあり、実らないうちに実をもぐことを厳禁されていたのである。

後に姉か兄に聞かされた話だと思われるが、夕食時私が居ないことに気付いた母親が私を押入れに閉じ込めていたことを思い出し、押入れを開けたところ、泣き疲れて眠っていたとのことである。7人兄弟の末っ子であったので、一人くらい姿が見えなくても家族は気にもしなかったのであろう。

近くの遊び仲間の家にこれも見事な実が成るサクランボの木があり、その実を分けてもらうために、漬け込んだ梅干の実と交換したことなどを思い出す。アンズと交換できれば良かったのだが、残念なことにアンズはサクランボより実りが遅く、時期が違ったために交換は出来なかった。お寺の裏山にはダイダイを盗みに行ったが、近所の実った果物を盗むということはなかった。近所同士の黙契というか約束のようなものがあって、それを破ると遊びの仲間に入れてもらえないことが分かっていたので（それはどんなことより厳しい罰といえた）、一切手を出さなかったのである。

（十二）

ただしいまにして思えば、（子供とはいえ）盗みよりもっと悪辣な行為をやってしまったことを告白しなければならない。それは八十八箇所を巡るお遍路さんへの迫害行為である。親からは常日頃お遍路には近付かないように言われていた。それが何故なのか私たちは知らなかったが、お遍路さんには病気持ちの人が多く、とくにハンセン氏病（当時ではらい病といった）を患った人たちがお遍路に多いということで親たちが偏見を持ち、子供たちに近付くことを禁じたのであろう。らい病は他人にうつり、うつると身体が腐るといわれていたのである。

郷里の宇和島には札所があり、お遍路さんの通り道になっている。私たちは、白装束に菅笠を被った

お遍路さんの姿を見かけると、遠くから石を投げたり、長い竹竿で突いて川に追い落としたりした。お遍路さんは怒りと屈辱で顔を歪めて私たち悪童を追っかけてきたが、クモの子を散らすように逃げおおせた。そのことを聞いた親たちは確かに子供たちを叱責したが、折檻を加えるほどではなかった。私たち子供は親の善悪の判断を微妙に受けて育つ。いくら子供であったとはいえそうした残酷な悪戯を正当化する積もりはまったくないが、当時の風評や世相はそうした子供の悪戯を半ば容認したのである。

子供たちは残酷なことを好む。親たちから受け継いだ行動というよりも、人間存在そのものの遺伝子と言うべきであろう。鼠やゴキブリや蚊などの害虫退治は仕方ないとしても、蛙の腹を生きたまま平気で割き、トンボの羽を引きむしり、アリの群れをマッチやライターで焼き殺し、蛇を見つければ徹底して罾り殺す。

一時期の流行であったが、普通の輪ゴムの三倍もある幅の広い輪ゴムを、親指と人差し指に巻いてその先端にU字釘を引っ掛け、引き絞って獲物を狙う遊びが流行ったことがある。狙う対象は主に石垣の中に潜む蛇である。命中すると釘は両端から蛇の身体に突き刺さる。頭に命中すれば蛇は間もなく死ぬが、他の部分に刺さると、たまらず穴から滑り落ちてきたところを棒や石で叩き殺すのである。

このU字又釘を使って山裾にあるお寺で悪質な悪戯を仕掛けたことがある。そこは妙典寺というお寺で、いつもの遊び場所に使っていた仏海寺とは違って、その更に奥にある山寺である。私の生家の番地は妙典寺前二区というのであったから、この山寺の檀家筋に当たる場所であったのかもしれない。妙典寺境内には広い池があって体長40センチほどもある見事な錦鯉が何十匹も飼われている。人が近寄ると餌を求めて集まってきて大きな口を開けてパクパクする。寺の人に見つからないように注意しながら、その口の中を目掛けて又釘を打ち込むのである。それを集団でやる。打ち込んだら素早く忍者のように境内からずかる。その夜か翌朝早く境内に忍び込み（といっても門が閉まっているわけではないのだが）、池を覗き込むと釘を打ち込まれた鯉が数匹腹を見せて浮いている。それを見届けて偲び足で退散するのである。

鯉を殺してどうこうするわけではない。お寺に敵意を抱いているわけでもない。ただ大切に飼われている大鯉を撃ち殺す喜びに気持ちが満たされるだけの行為なのである。この悪戯は後に問題となり（大きな損失をお寺に与えた）両親のところにも詮索の回状が届いたようであったが、私たち悪戯坊主グループの仕業と特定されることがなく、そのうちやむやとなってしまった。ただし、池には監視が付いた形跡があり私たちは二度と池に近付くことはなかった。

又釘遊びが程なく廃れたのは、流指の間から引き絞って釘を挟んだゴムを放す時、誤って指を傷つけることが多発したからである。切り傷などと違って、尖った釘の先端が、輪ゴムを広げた親指か人差し指の内側を挟むような傷となり、ダメ大きかったのである。

この輪ゴムの改良型が、パチンコと呼ばれる飛び道具である。作り方としては、まずYの字型の木の枝を切り取り（枝の太さは一センチ強、股の先端の間隔は15センチほど、握りの部分を含めて全体の長さは20センチほど）、Y字両先端に切り込みを入れ、パンクした自転車のチューブを細く切り取

ってその部分に巻き付け、針金で固定する。ゴムの両端を30センチほどに切り、縦一センチ横五センチほどに切り取った牛革の両端に穴を空け、二つのゴムを結び付ければ完成である。

皮の部分に小石か鉛玉を挟み、ゴムを引き絞って狙った獲物に向けゴムを振り絞ってヒョウと放つ。この武器はかなりの威力があり、木の枝に止まるスズメやカラスなどを撃ち落とすことが出来た。人間の顔などに当たれば普通の傷で済まされない大怪我となることは必定であり、暗黙のルールが出来て、さすがの悪童たちも喧嘩や模擬戦争に使用することはなかった。

私はこの遊具に夢中になった。70パーセントほどの確率で木の枝に止まるスズメを打ち落とすことができるようになった。ゴムの性能で威力が違ってくるのが明らかとなり、やがて、医療用に使われる直径5ミリほどの中が空洞になった虫ゴムを誰かが見つけ出し（天才的な発想というべきである！）、そのゴムが広く使われるようになった。タイヤのチューブに比べて弾力性があり、引き絞ると長く伸びるので、玉は遠くまで飛び命中精度も良くなるというわけである。後に空気銃が普及するようになってこの遊具も次第に廃れていった。

弓もそうであるが飛び道具は危険な遊びであり、親たちからも厳しく注意されるので次第に使われなくなってゆくのは自然な成り行きといえる。

子供たちの残酷で危険な遊びは、拷問や処刑の方法や戦争の形態など、すべて後の大人たちの行動の雛形なのである。子供はそれらの遊びによって大人になる準備をしているといえる。もちろん、子供特有の無邪気で創意に富んだ遊びが主力であったことは間違いない。無邪気さと運動量の多さに大人は付いていけず、また興味も失せてしまう。

例えば缶蹴りなどはどうであろう。広い場所があれば大人でも面白く遊べるが、子供（私たち）のやり方に大人は付いて行けないはずである。私たちは徹底して遊びを遂行する。缶蹴りのルールは誰でも知っているとおりの、初めジャンケンで鬼が決まり、目をつぶった鬼の目の前に置かれた空缶を、参加者の一人が蹴って一目散にどこかへ走り隠れる。10数えた鬼が隠れた参加者を見つけ出し、誰々見つけと称えて缶を踏み付け、隠れた仲間をすべて見つけ出せば、最初に見つけられた人間が次の鬼となる。

だがこの遊びはそう単純には鬼の交代は実現しない。動きが鈍く仲間内でも年が若い子供が鬼になってしまうと、鬼地獄へ突き落とされてしまう。隠れている人を見つけて缶のある場所へ帰ってきて缶を踏んで初めて一人を減らすことになるわけであるが、帰ってくる前に別の場所から走ってきた仲間に缶を蹴られてしまうと、また初めから人探しを始めなければならない。鬼になった人次第では同じことが一時間でも二時間でも続くのである。そのうち鬼は業苦に耐えられなくなり泣きべそをかくようになる。徹底したいじめの形態である。私は余りすばしっこくない方であったから、よく鬼で泣かされた。見つけても見つけても、帰ってくる間に缶を蹴られてしまうのである。それが20回30回と続くと、死んでしまいたいくらいに辛く悲しくなる。それでもガキ大将は終了を宣言しない。暗く

なって缶が見えなくなるか、夕食で親が呼びに来るかして初めて終了が宣言される。そのときのほっとした感覚は、救われたというより命拾いをしたといった感じであった。

(十三)

夕食後に遊びで集まるということは滅多にないが、お寺の裏山に生るダイダイ盗みは論外としても、先に述べたワンツキドッカンは夜に行われることが多かった。

夜の行事といえば亥の子祭りを思い起こさせる。これは遊びというよりは行事であり名のとおり「祭り」なのである。旧暦の10月（亥の月）の亥の日、夕方から深夜にかけて、男の子供たちが臨時の親となる大人の家を集まり、丸く平べったい石に八個ほどの綱を着けて、町内の家々の玄関前でその石を搗く。

直径20センチほどの丸い石の周辺に刻みを入れそこに鉄のタガを嵌め、タガに八個ほどの鉄の環を固定したのが亥の子石である。環の全てに一メートル強の綱を縛り付け子供たちがそれぞれ綱を持って、亥の子唄を唄いながら一斉に綱を引き上げて石を持ち上げ、地面に叩き付ける。大地を搗き固める動作を繰り返す。

玄関先で挨拶して亥の子を始めるのであるが、終わると家の人が出てきておひねりやお菓子を全員に配ってくれる。それが楽しみで亥の子に参加するのである。憶えている亥の子唄をここに再現してみよう。

「おいのこや、おいのこや、おいのこさんを祝いましょ。

一つ一からふんばって、

二でにっこりわーらって、

三でさーけをつーくって、

四つよのなかよいように、

五ついつものごーとくに、

六つむびょうそくさいに、

七つなにごとないように、

八つやしきをひろめたて、

九つこくらをたてならべ、

十（とう）でとうとうお一さめた、

ウェーイ、ウェイ」

というものである。ほとんど何の意味もない単なる語呂合わせに過ぎないが、その家の繁栄を願う内容になっていることは確かである。旧暦の10月というのは現在の暦の11月半ばであり、手を凍えさせながら家々の門口を巡り歩いた記憶は鮮明に残っている。

田舎の年間の祭りは月ごとにあって大人の娯楽に事欠くことはない。中でも市を代表する神社である和霊神社の例大祭は、真夏（7月）に執り行われ、神社の前を流れる須賀川に数基の神輿が走り込む「走り込み」は勇壮であり、牛鬼と呼ばれるこの地方独特の「担ぎ物」が有名である。長さ10メートルほどの木枠に細く割いた竹で胴体を作り、後尾がこんもりと盛り上がるように整形され、赤い布が全体に被せられる。前部に二本の角が付いた鬼頭を戴いた三メートルほどもある長い首にも赤い布が巻き付けられ、後尾に剣の形をした尻尾が立てられる。そのおどろおどろしい姿は、畏怖を抱かされるのに十分である。

20人ほどの気合の入った大人たちに担がれ首を降り立てて練り歩く様を始めて見る幼児は、泣きじゃくって抱かれた親にしがみつくほどの迫力がある。牛鬼は町内ごとに造られ街中を練り歩くのであるが、牛鬼同士が鉢合わせをすると、ぶつかり合いを演じて時として乱闘となる。特に丸穂地区の牛鬼は荒っぽく巨大なことで名高く、胴体と首は赤布ではなく棕櫚の木の皮を剥いだものを全面に貼り付け、そのおどろおどろしさは他を圧して郡を抜いている。

他の地区の牛鬼は出来るだけ、丸穂牛鬼との鉢合わせを避けようとするが、それでも鉢合わせが避けられない時には覚悟を決めてぶつかり合うのである。ただぶつかるだけではない。各牛鬼の背には進む方角などに指令を出す人が一人乗っていて、ぶつかり合いになった時、どちらかが相手の背に飛び移り、文字通りの二人の取っ組み合いとなる。

丸穂地区の指令担当者は匕首を隠し持っていて、相手を刺し殺してしまう事件が私の子供の頃にあった。したたかにお神酒を胃の腑に仕込んでの「出陣」であるから、荒っぽさを超えたそうした事件が起こっても不思議ではないのである。見物人たちにもそうした乱闘が起きるのを待ち望むふうもあり、牛鬼の練り歩きは、街の人たちを興奮の坩堝に投げ込んでしまう。

私たち子供はむろん担ぎ手にはなれないが、孟宗竹を節を残して30センチほどの長さに切り、節の近くに一センチほどの穴を空け両端に紐を結わいつけて首から吊るすように作られた「かいぶき」と

呼ばれる一種の楽器がある。楽器といっても穴の縁に唇を着けて吹くと「ヴオー、ヴオー」という単純な音が出るだけであるが、私たち子供20人ばかりがその後ろにくっ付いて一斉に「ヴオー、ヴオー」と音を出すと、牛鬼の吼え声とでもいうべき異様で音が響き渡り、雰囲気をつやが上にも盛り立てるのである。子供たちはいつかその担ぎ手の一人になりたいと憧れて育つのである。私は高校卒業と同時に宇和島を離れたのでついに担ぎ手にはなれなかった。いまだにそのことを残念に思っている。

さらに思い起こされるのは和霊大祭時のお祭り広場である。神社の前を流れる須賀川の対岸に祭り広場用の広大な敷地があり、祭りの時期になるとそこに様々な催しや露店が立ち並ぶ。恒例の木下大サーカスを筆頭に、お化け屋敷、ろくろく首の見世物小屋が軒を連ね、何百店もの露店が華を添える。兄弟に連れられてサーカスもお化け屋敷もろくろく首も毎年必ず見に行った。

サーカスは観る度に驚嘆させられ、お化け屋敷に肝を冷やしたが、ろくろく首にはがっかりさせられた。毎度の口上「親の因果が子に報い、生まれ出たのがこの子でござい。」に被せるようにして入り口の脇のゴザの後ろを、首から上だけ出した髷を結った若い女が行ったり来たりする。その下がろくろく首になっているのか蛇の形をしているのか、外から見ただけでは分からない。口上の後に驚くべき畸形を示唆するような言葉が入り口の木戸番によって述べられるのである。

大人同士の連れは中身がすでに分かっているので入る人は少ないが、子供連れの親や子供同士は口上に釣られて木戸銭を払って小屋に入るのである。固唾を呑んで見守る内に、入り口のゴザの後ろで行ったり来たりしていた女が着物を着て登場する。むろん、ろくろく首でも首の下が蛇身でもない。ごく普通の人間である。女は曲芸めいたことを少し披露してすぐに袖に消える。それで見世物は終わりである。完全なまやかしといえる興業なのであるが、祭りの渦を巻くような雰囲気がまやかしを許してしまうのである。小屋の入り口に掲げられたろくろく首と蛇身の絵が、子供たちの想像力をいやが上にも掻き立てる仕組みである。

こうした多彩で変化に富んだ子供時代を送っているうちに、いつしか小学校後学年に達し、生家である妙典寺前二区を離れる時がやってきたのである。